

Gallery Talk 誌上 ギャラリートーク



照屋勇賢《告知-森：マディソンアベニュー、NYC(マクドナルド袋6つセット)》
2011年 ©Yuken Teruya Studio

小さな世界へようこそ!

会期：2013年2月9日(土)～3月24日(日)

照屋勇賢

《告知-森：マディソンアベニュー、
NYC(マクドナルド袋6つセット)》

今回の展覧会のテーマは「小さなもの」。これまでやすく繊細な、でもだからこそ美しい小さなもの、そのような作品を高松市美術館コレクションと5人のゲスト・アーティストの仕事の中からご紹介します。ゲスト・アーティストは伊藤存、開発好明、須田悦弘、照屋勇賢、渡辺おさむ、といった、現在国内外で活躍を続ける気鋭のクリエイターばかりですが、ここでは照屋勇賢の作品に触れます。

照屋は1973年沖縄に生まれ、2001年にニューヨークの大学院で美術を学んだ後、現在に至るまで同地で制作を続けています。様々なタイプの作品を手がけていますが、代表シリーズといえるのが、ここに図版を掲載した《Notice - Forest (告知 - 森)》です。箱の中に樹木が1本立っていますが、これはファーストフードの紙袋から樹木を切り出したものです。ありふれた脆弱な素材で精巧なジオラマがつくられていることも驚きです(美しい木漏れ日つきで!)。しかしそれ以上に、紙袋の中に、その素材のかつての姿である樹木をつくることで、ものとしては実に小さなサイズでありながら、「環境」や「消費」といった地球規模の問題へと私たちの想像をいざなうその手際の良さは、見事というより他ありません。今回の展示では他にも、トイレットペーパーや新聞などの身近な素材によるイマジネーション豊かな作品が出品されますので、ぜひお楽しみに。

[高松市美術館学芸員 牧野裕二]

宮永愛子《ポスト - 景色》

宮永愛子はナフタリンや塩を使った作品で注目を浴びる、京都市生まれの現代美術家です。靴、カップ、ノートなどごくありふれた日用品をナフタリンで彫刻し、透明のケースに入れ光を当てると、ライトで照らされた乳白色がキラキラ光り、幻想的な空間が生まれます。

でもナフタリン、たとえば「時間が経つとこの作品無くなるんじゃないの?」…宮永さん自身、タンスの片隅に残っていた防虫剤の欠片(かけら)を見つけたのがこのシリーズを作るきっかけとか。これは、固体から気体になる『昇華』という現象ですが、密封されたケースの中では、気体になったナフタリンが大気中に発散されず、再び結晶としてケースの内側に現れる、つまり「消滅ではなく、形を変えて存在している」ことに気付いたのだそうです。

「時間の痕跡があるものにひどく惹かれる」という宮永さんは、和筆笥などの古い家具や木箱など、歴史の陰影を帯びたものも作品として登場させますが、今回の展覧会でお目見えする作品はフランスで見つけた古いポストにナフタリンで彫刻した鍵を組み合わせたものです。ポストも鍵も大変個人的なもの、そこに届いたもの開けられたもの、過ぎた時間に思いを馳せてみてください。

[池田幸子]



宮永愛子《ポスト - 景色》2010年 高松市美術館蔵

時	記事	活動内容
4/1		しびのーと 25号発行
4/13～5/20	A★	「春の京都から、日本画名品展」(会期中毎日曜・祝日)ギャラリートーク★
5/26～7/1	B★	「すべての僕が沸騰する 村山知義の宇宙」(会期中毎日曜・祝日)ギャラリートーク★
6/30・7/1	C♥	子どものアトリエ「TOMさんと籌子さんの絵本を影絵劇にしよう!」(講師:人形劇団「ドリーム」・河野美恵子氏)アシスタント★♥
7/28～9/9	D★	「高松コンテンポラリーアート・アニュアル vol.02」(会期中毎日曜・祝日)ギャラリートーク★
6/16～7/29	E♥	ワークショップ「きみのみらいをおしえます」(講師:美術家・山本高之氏)アシスタント★♥
8/4	F♥	ワークショップ「チルドレン・プライド 8.4 in 高松」(講師:美術家・山本高之氏)アシスタント★♥
8/11		ワークショップ「現代美術講釈入門」(講師:現代美術家・やなぎみわ氏)アシスタント★♥
8/18	G♥	ワークショップ「3次元のドローイング」(講師:美術家・八木良太氏)アシスタント★♥
8/25	H♥	ワークショップ「大人のコマ撮りアニメ」(講師:写真家・GABOMI氏)アシスタント★♥
10/6	I★	岡山県立美術館「自由になれるとき 現代美術はこんなにおもしろい!」展鑑賞および秋元雄史氏講演会聴講★
11/10	J★	香川大学にて陶芸制作研修★

★ボランティアcivi(シヴィ)による活動 ♥学生ボランティアcimi(シミィ)による活動



あらためてその

作家・村山(かず)子との夫であり、彼女の童話に挿絵を描き共作していた画家、程度の知識しかありませんでした。ところが、じつは非常にマルチな才能の持ち主で、私より一世代前の人々の間では大変な有名人だったようです。今回の展覧会では、村山の多方面の活動に関する数多くの資料が一堂に集められ、

「すべての僕が沸騰する」村山知義の宇宙

かなしだれ桜の下で憩う浅井長政、お市、三姉妹の夢の様なひと時の絵、どの絵も本当に素晴らしい!日本画とはこんなにいいものだったのか、と思わせてくれる展覧会でした。植松紀子



は、目を見張るものでした。竹内栖鳳の屏風絵の凛とした美しさ、土田麦僊の髪を結う湯上りの女性の匂うような色気、華やかな

春爛漫の京都から、京都画壇を中心とした日本画がこの高松にやってきました。明治維新後、日本には外国から様々な文化が押し寄せてきました。そんな中、京都では京都府立学校が日本で初めて開校され、伝統的な日本画に外国の美術技法を取り入れた新しい日本画を描こうという気運が高まります。伝統ある日本画に、大変興味深い展覧会だったと思います。また、当時の若い日本画家たちの技量の確かさは、目を見張るものでした。竹内栖鳳の屏風絵の凛とした美しさ、土田麦僊の髪を結う湯上りの女性の匂うような色気、華やかな

「春の京都から、日本画名品展」



かかりを作った

VOICから数えて3回目のアニュアル展。毎回頭を悩まされる展覧会ですが、その中でもまるで謎解きのような作品に、朝から晩まで取り憑かれたようになっていると、不意に、これこそ作家の意図するところではないか?などと思ったりします。「贈り物と交換」という何とも思わせぶりの言葉の組み合わせによるサブタイトルも、故意に心にひっかきを作った

「高松コンテンポラリーアート・アニュアル vol.02」



「翠さやか」

村山知義が挿絵を描き、妻・籌子が話を書いた絵本。その絵本を基に人形劇団「ドリーム」の河野美恵子先生と一緒に2日間渡る影絵劇作りに挑戦しました。大変だったのは影絵の人形作り。黒い厚紙を人形の形に切って手足が動くように輪ゴムとテグスで仕掛けができたら完成です。最後は保護者を招いて影絵劇の発表会。影絵劇の舞台裏は人形を操る子どもたちが大忙し。みんながつなげて影絵劇は無事に幕を閉じました。

子どものアトリエ「TOMさんと籌子さんの絵本を影絵劇にしよう!」アシスタント

多芸多才ぶりを再認識させられました。戦争前の思想弾圧厳しい時代に、思想をひるがえすことなく敢然と生き抜き、戦後さらに新たな才能を開花させた人、村山の人生をたどり、今の日本人が忘れていて、一本の強い芯を感じました。[石原ミエ子]

「チルドレン・プライド」とはアニュアル展出品作家・山本高之さんの作品です。この作



「植松紀子」

7月に開催された、高松コンテンポラリーアート・アニュアル展に出品された山本高之さんの映像作品のもとになった4日間かけてのワークショップです。小学生に占い師になってもうというもの。どんな占いをしたいか、考えてもらい、それに沿って、ダンボール等を使い大きな屋台を作りそこで実際に占いをしてもらいます。子供たちが考えた占いは、宇宙占い、サッカー占い、ケキ占い、家占い、などユニークなものばかり。さて、その占いの為にどんな屋台を作ればいいのか子供たちと共にサポート役の私達も本当に悩みました。ダンボールを組み立て、色を塗り、飾り付けをし、出来上がったのは、安定感が無くぐらぐらしたり、試行錯誤のくりかえしでやっと出来上がりしました。各々占い師らしい衣裳を身につけ、リハ・サルを繰り返して、いざ発表会。まあ!どの占い師も得意満面、堂に上ったものです。大変なワークショップでしたが、この子供たちの満足そうな顔を見たら、私も大満足でした。

ワークショップ「きみのみらいをおしえます」アシスタント

作家からの「贈り物」を好きに深読みして新たな自分を発見する喜びを味わうことのできる貴重な展覧会だと思えます。[坂口弘子]



品は、子供たちのワークショップがベースになっていて「朝起きてから夜寝るまで、こうなったらいいな」という願いをもとにプラカードを作り、街に出て自分や友達の願いを連呼しながらデモ行進します。このデモ行進の様子を撮影したものが作品となり、展示会場に出品されました。大人のデモ行進（大人の場合は社会的に意味がある）を真似するとは言っても暑い中、商店街を本気で大きな声でデモ行進するのは大変でした。でも子供たちはこの主義主張を訴えるやり方をちゃんと理解できていた気がします。

「三好ひさ子」

★ ワークショップ 「3次元のドローイング」 アシスタント

八木さんのワークショップは透明なビニール製のボールの表面に赤と青のマジックを使い、その2色を微妙にずらして図案を描くことによって、それらがまるで飛び出してくるかのように見える「3D」もの。図案は前面に飛び出して見えるので、ボールの向こう側に描いたものは、まるでボールの内部に浮かんでいるように見えます。その効果は赤と青のずらし方の技術に大きく左右されますが、子どもたちの作品は不思議な浮遊感のあるボールとなり、ふわふわと楽しいワークショップとなりました。

「坂口弘子」

★ ワークショップ 「大人のコマ撮りアニメ」 アシスタント

いつもは静かな美術館が夏の遊び場にヘンション!!大躍進中の写真家GABOMIさんのワークショップのテーマは「バケーション」。写真を何枚もコマ撮りしたものを再構成してつなげ映像化したもので、アニメーションの写真版というイメージです。みなさん夏の風物詩の浮き輪やビーチサン・麦わら帽



などを持参し撮影に挑みました。ムームーを着た美女三人の姿に、ここはハワイかと見まごう程!!一歩動いてカシヤ、ジャンプしてカシヤと撮影を重ね完成した作品は、サーフィンスーサーの常夏ナンバーにのった、まさに楽しい夏休みでした。

「木村真由美」

★ 岡山県立美術館 「自由になれるとき 現代美術は こんなにもおもしろい!!」展 鑑賞および秋元雄史氏講演会聴講

10月6日、岡山県立美術館に研修旅行に行ってきました。開催中の特別展「自由になれるとき 現代美術はこんなにもおもしろい!!」には現在活躍されている作家さんの作品が楽しく、わかりやすく展示されており、高松市美術館からも多くの作品が貸し出されています。見慣れた作品も展示場所や作品のレイアウトが異なることで新鮮な気持ちで鑑賞することができました。また、金沢21世紀美術館館長秋元雄史氏の講演会では、同美術館での体験型の鑑賞への取り組みを楽しく拝聴しました。現代美術は解りにくいと思われる方もいますが、まずは見て、体験して、面白い面白くないから始めてみてはいかがでしょう。

「石床亜希」

★ 香川大学にて陶芸制作研修

11月10日、香川大学の陶芸教室にて陶芸制作の研修に参加しました。体験したのは、お皿やカップの3点の制作と素焼きのお皿への絵付けの計4点です。準備されたいた粘土を荒練や菊練りなどの方法でこねて形成前の下準備から作業をしましたが、これが思ったよりも難しく力も必要なうえ、この作業をきちんとしておかないと焼いたときに割れることもあると聞き、緊張しながらの作業となりました。普段は出来上がった作品とのふれあいばかりの中、その制作過程を体験する機会が持てたことは大変貴重だったと思います。今回の経験を今後、ぜひ皆さんとのギャラリートークの中で生かせることができればよいと思っています。後日談ですが、12月の定例会ではこのとき制作した器を使い、お茶会をしました。自分で作った茶器を使ってお茶は普段とは違った味がしますね。

「石床亜希」

ドクメンタに行ってきました!

5年に一度開催される、世界が注目するドイツの美術の祭典「ドクメンタ」。どんな楽しいお祭りなのか?とワクワクしながら日本からやってきたものの、予想していた「おまつり」とは雰囲気異なるイベントでした。平たく続く広い公園にポツポツと作品が点在するのですが、それがとても自然に現れてくるのです。「ああっこんなところに素晴らしい作品が!」と歓声があがることはありません。作品が、木々のおいや空気、散歩する犬の足取りや、すれ違う人の表情をゆっくりと際立たせ、それによって私達の五感が研ぎ澄まされるような感覚を覚えました。ドイツの人たちにとってアートが生活の一部であることが実感されました。

私がなかでも気に入ったのはピエール・ユイグの作品。綺麗にならされた芝生から突如ジメジメした湿地に入ります。もともと堆肥であったその土地の性質を利用してユイグは作品を制作しているようです。そこで何かをスケッチする作者本人と足が蛍光ピンクに塗られた犬が二匹。腕にはミツバチの巣を持つツバ作られた裸婦像。草、土、空気、水溜り、どこまで彼の作品かは分かりませんが、堆積したこの土地の過去の時間、目には見えない土の生き物、循環する自然のシステムに思いを巡らせるなか、突出して異質な存在である犬の足の蛍光ピンクが強く目に焼きつきました。

「田中みなみ」

2012年9月11日、24人のアーティストの作品が点在するとても広大なカールザウエ公園内を一日中散策して、ようやく大竹伸朗の作品にたどり着いた。ドクメンタにはどこかシンプルで整えられた雰囲気のある作品が多いと思っていたが、この場所は複雑で怪しく、どこか懐かしいような雰囲気を漂わせていた。宇和島のフェリー発着の時刻表や雑誌の切り抜き、自転車の車輪、ネオン、毛筆で書かれた「ドクメンタ」「カッセル」の文字など、家の壁にも中にも無数のコラージュが張り巡らされていた。家からは唸るように不気味な音が鳴り、煙突からは水蒸気が立ちのぼり、まるでそこに誰かが住んでいるような、主のいない家をこっそり訪ねて覗いているような気分になった。家は作家のあらゆる記憶で充満していた。その中には東日本大震災の記憶も反映されているという。家はその土地に根を下ろして、動くことはできない。家の周りにはあるポートやキャンピングカーは自由に移動できる。それらを同じ空間に置くことの意味が日本人だけでなく、世界からここに引き寄せられた人たちにどう伝わったのだろう。次のドクメンタの開催は5年後の2017年。長いようで短いこの5年の間にどんな記憶がコラージュされていくのだろう。



大竹伸朗作品



ドイツで宇和島の時刻表に出会えるとは!

ドクメンタ会場風景

「翠さやか」

やなぎみわワークショップ「現代美術講釈入門」について

OJUN《津波》2010年

現代美術作家のやなぎみわさんは近年、「1924」三部作（第三部「人間機械」は当館でも上演）をはじめ、演劇の制作に取り組んでいます。8月11日やなぎさんの演劇にしばしば登場する「講釈」を体験するワークショップが開かれました。「講釈」とは、講釈師がハリセンを片手に、威勢良く、軍記ものなどを朗読する芸のことです。参加者はまず、やなぎさんから講釈の歴史や内容に関する「講釈」を受け、その後、常設展「旅のはざまー私はここにいます」に出品されている作品の講釈づくりと発表に挑戦しました。演技指導は、やなぎ演劇の看板女優である山本麻貴さんにご協力いただきました。子どもから大人まで、参加者の皆さんは、「詩人」「作品の作者」「テレビショッピングの司会者」など様々な役柄に扮し、想像（妄想？）力豊かなユニークな講釈の数々を披露してくださいました。その出来栄は予想をはるかに超える楽しいものばかり！参加者の記憶だけに留めておくのはもったいない…ということで、3つだけですが参加者の講釈作品をご紹介します。



やなぎみわ氏（右）と山本麻貴氏（左）

西野達《Life's Little Worries in Berlin》
2007年



女子高校生Aさん
…OJUN
《津波》
の印象
を詩で
表現



家がピンクのドロドロの中にありました／屋根の上にのぼってみると空までもピンクに覆われています／どうしたんでしょう／ドロドロは街を平らにしました／ドロドロはまだ固まっていないコンクリートのようです／ピンク色のコンクリートです／空から地面までピンク色です／私はピクニックの準備をして、ピンクのドロドロの上を歩いていきました

成人女性Cさん…西野達

《Life's Little Worries in Berlin》を深夜のテレビショッピングで紹介するという設定

さまざまな商品を揃えています。こちらが一番皆さんの役に立つ商品です。今、ストレス社会です！皆さん普通に暮らしていて健康だと思っても、どこかちょっとした「モヤモヤ」があるんです。そういう方、これを見てください。これは何でしょう？思いのほか軽いのか…それで自分の心の精神状態がわかります。「自己セラピー」です。これを一枚買ってくださいと、あとはいりません。一生ものです。健康な精神状態の方は感受性を高めることに使ってください。日常生活のなかに突如このような不思議な状態！ご覧いただくと、いろいろなイメージが浮かぶと思います。365日あれば365通り考えていただけます。これで老人の方は若返り、若い方はますます若くいられます。なんとこれが、おいくらだと思いませんか？これ、今日だけです。50点しかありません。しかもサイン付きで19,800円！！お早めにお電話を！お待ちしております。

男子高校生Bさん…西野達

《Life's Little Worries in Berlin》の登場人物をテレビ番組のなかで紹介するという設定

ビックリ人間、ばんざい！！さあ今週も始まりましたこのコーナー。今日ご紹介するビックリ人間はこの方！ベルリンにお住まいのアドルフ・ヘンリーさん 48歳無職です。この方、3年前に奥さんとケンカして家を出されて、そこから家に帰ってないそうです。「なんでケンカしたの？」と訊きますと「3年前の彼女の誕生日にサッカーボールを3つあげたんだ。そしたら彼女が『3つもいらがな！』…僕はもう怒りに任せたよ。荷物を集めたよ。奥さんのために買って来た3つのサッカーボールも持って出てってやったよーそれでもなぜベルリンを離れられないんですか？と訊くと「奥さんがまだ僕のことを探してくるのかと思ましてー仲直りされて我が家に帰れる日がくるといいですね。以上、「ビックリ人間ばんざい！！」のコーナーでした。

やなぎさんは、後日メールでワークショップの感想を次のように述べてくださいました。「とても刺激的なワークショップでした。大人も子どもも、予想以上にしゃべるしゃべる…山本麻貴という「演者」が、作品をネタにひとつの話芸を披露したことで、皆の中にあるスイッチが「解除」されたようです。作品の前で何か言う。それによって芸術が「息吹く」なあ、と感じ入りました。」「作品の前で何か言う。それによって芸術が息吹く。」…今回のワークショップの成果はやなぎさんのこの言葉に集約されていると思います。展覧会でのギャラリートーク、友人や家族との作品を巡るおしゃべり、ソーシャルネットワークでのつぶやき…美術作品への思いを言葉で表現し、それを伝えることがいかにクリエイティブで心を豊かにする営みであるか、ということが再認識されました。そしてワークショップに集まった「劇団員」たちをブレイクさせた、やなぎみわさんの演出力に敬服です。【牧野裕二・翠さやか】



美術館日記

「すべての僕が沸騰する 村山知義の宇宙」展から

- 2012年5月26日 村山知義の宇宙展オープニング式典にて、ギャラリー TOM 館長・村山治江氏のごあいさつ。
- 5月26日 式典後開催された対談。村山展を中心になって進めた水沢勉氏と演劇で新たな村山解釈を試みるやなぎみわ氏。
- 6月9・10日 やなぎ氏の演劇作品「1924 人間機械」。ベルリン留学、帰国後の前衛的活動、そしてリアリズム演劇の活動へと移行していく村山の若き日の「沸騰」の日々が大胆な設定により見事に活写される。
- 演劇のラストシーン。前衛芸術家の村山は美術館の収蔵庫へ、コミュニストの村山は街宣車と共に街中へ。展覧会という形式では

十分な再現ができない在りし日の村山の圧倒的な熱気を、やなぎ氏の演劇は見事に再現前化してくれた。5月16日 村山知義の妻で児童文学者の・籌子（高松生まれ）と音楽の関係について、籌子研究家・山崎玲氏にレクチャーをしていただき、さらにゆかりの音楽の演奏も行った。6 会期中毎日曜日「伝々虫」のみなさんによるおはなし会。村山知義・籌子の絵本原画コーナーにて。

ご案内

美術館ボランティア「civi（シヴィ）」によるギャラリートークは、特別展会期中の毎日曜日および祝日の午前11時～午後2時～の1日2回、2階展示室にて行います。

私たちと鑑賞をご一緒しませんか？

発行：高松市美術館 編集：civi & 牧野裕二（高松市美術館）
デザイン：福田千恵（高松市美術館）

高松市 760-0027 香川県高松市紺屋町10-4
美術館 Tel: 087-823-1711 Fax: 087-851-7250

編集後記

■大阪中之島で宮永さんの作品に向き合ったとき、作品の息づかいを感じました。あらゆるものがデジタル化される現代、こんなレトロでアナログ的な呼吸し続ける作品に特別な思い入れを感じます。【池田幸子】

■今回は普段とは違った体験の記事を担当させていただきました。スペースに制限があり、伝えたい事を限られた字数でまとめる事の難しさを痛感しました。11月から風邪がなかなか完治しませんが、これから寒さも忙しさも本番！皆様も体調にはお気をつけください。【石床亜希】

■今日は、総選挙投票日、とにかく一票は投じますが、全くの政治音痴の私でも今の日本の混乱ぶりを異常に感じます。船頭多くして船は一体どこに…。【石原ミエ子】

■今年は暑かった夏から秋が無く急に冬になった様な気がします。春の京都から～の原稿を書きながら、ああ、桜の咲く春が恋しいな、

と思ってしまいました。【植松紀子】

■絵が上手い人は字がキレイ、習字をがんばれば絵心のある人になれるかな…。何ごともバランス感覚が大切と感じる今日この頃です。【木村真由美】

■八木さんのWSの後、子どもたちと一緒に「星の王子さま」をテーマにした作品を観ました。男の子が不意に作品中のセリフを読み上げ、まるで王子さまがそこに現れたような、夢のようなひと時を過ごしました。【坂口弘子】

■今年は瀬戸内国際芸術祭があり前回以上の盛り上がり期待されます。2014年には横浜トリエンナーレが開催されますが、先日そのディレクターに森村泰昌さんが就任との嬉しい知らせが。森村さんには「モリエナーレ」でお世話になりましたが、次は世界が目する「トリエンナーレ」でどのような手腕を発揮されるか、とても楽しみです。【高松市美術館学芸員 牧野裕二】